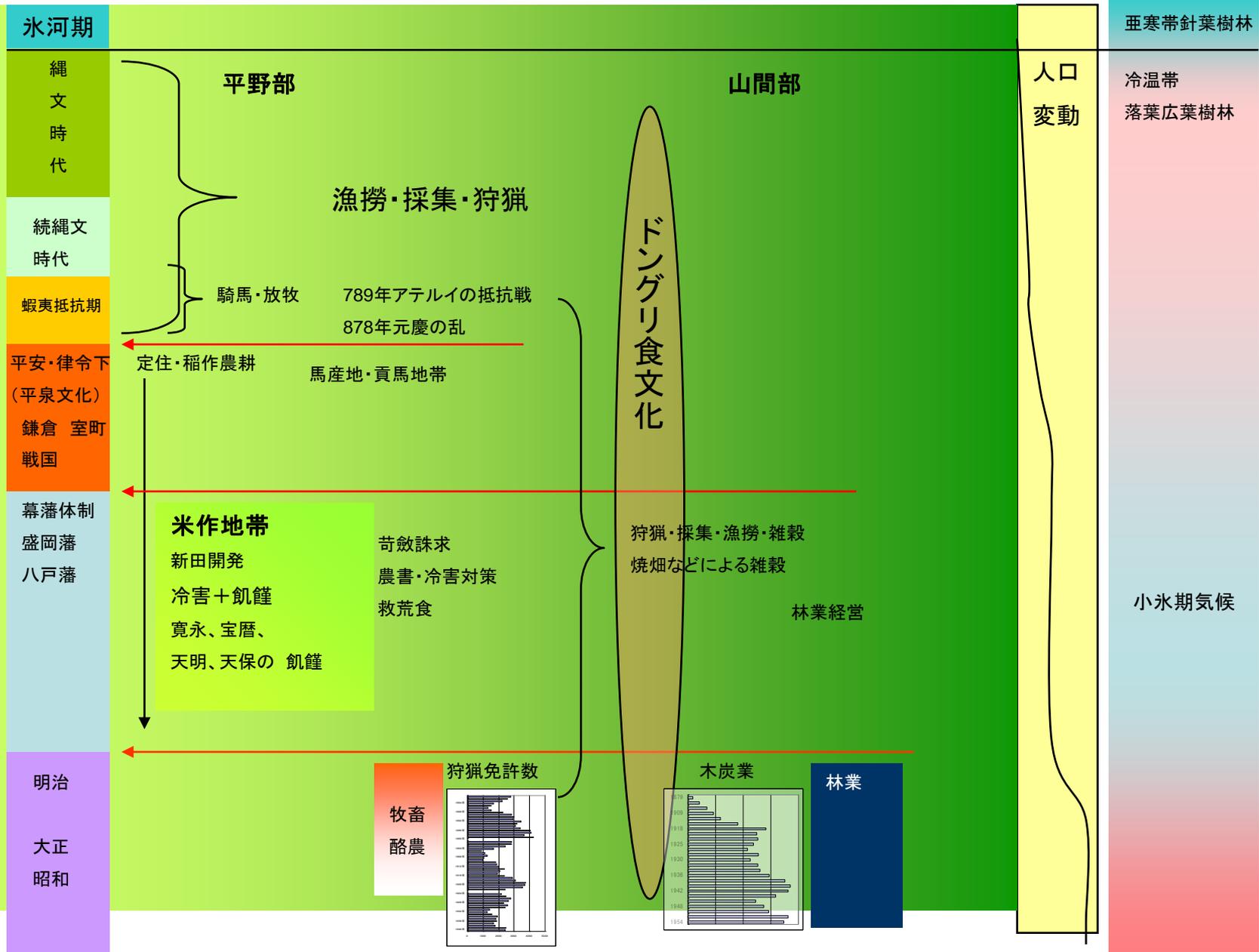


岩手地方・北上山地の環境史



大飢饉地帯

1695(元禄8年)

津軽藩・弘前藩 大凶作皆無作 飢饉 死者30,000人
盛岡藩 大凶作皆無作 飢饉 死者約40,000人

1755－1756(宝暦5年-6年)

盛岡藩 大凶作皆無作 飢饉 死者約50,000人
八戸藩 飢饉 死者多数
秋田藩 減収 189,000石

おもに1783－1784(天明3年－天明年間)

弘前藩 飢饉 死者 80,000人
盛岡藩 飢饉 死者 64,698人 逃散3,330人(天明3年)
八戸藩 飢饉 死者 30,000人
仙台藩 飢饉 死者200,000人
秋田藩 飢饉 減収 195,200石(天明3年)

おもに1836－1837(天保6年-7年)

盛岡藩 大凶作 減収 223,250石(天保4年)
盛岡藩 大凶作 減収 201,550石(天保6年)
盛岡藩 大凶作 減収 232,500石(天保7年)
弘前藩 飢饉 死者 35,000人余(天保年間)
秋田藩 飢饉 減収 292,280石(天保4年)

江戸時代 東北地方北部は、稲作農業を営むには、気候的にも、藩行政をみても、たいへん厳しい状況下にあった。

南部・津軽両藩凶作など災害年表

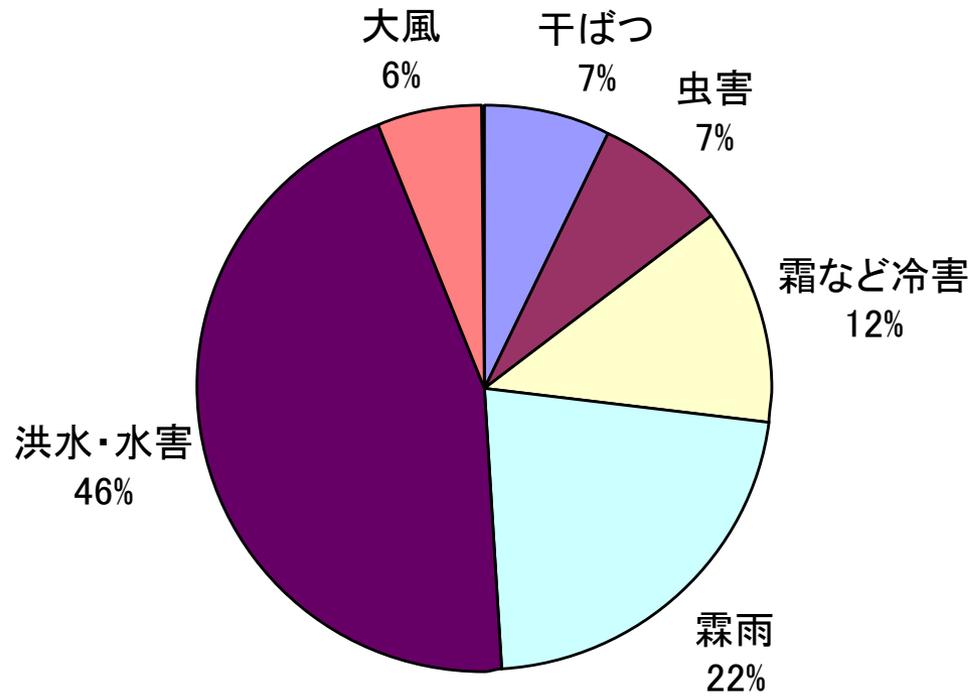
西暦	年号	津軽藩	南部藩	全国
1615	元和1	大凶作皆無作	不熟 凶作	
1616	2	不作不仕付		
1617	3	大凶作皆無作	凶作	
1619	5		凶作	大凶作
1640	寛永17	大凶作皆無作		
1641	18		大凶作皆無作 霖雨 飢饉	
1642	19		不作 水害	
1646	正保3		凶作 品物凶作	
1647	4		水害 盛岡洪水	
1648	慶安1		水害	
1658	万治1		不作	
1659	2		不作	上方飢饉
1661	寛文1		凶作 6分作霖雨 大風 水害	
1669	9		凶作 湯君飢饉	
1670	10		不作 (凶作) 盛岡大洪水	
1674	延宝2		凶作	
1675	3		既内大凶作	
1677	5		水害 盛岡洪水	
1680	8	不作 大洪水	不作、丹藤川洪水	
1682	天和2		疫病流行	
1686	貞享3		盛岡・八戸領凶作	
1687	4	藩南部藩へ継米	不作 飢饉	
1688	元禄1		不作 2~3万石減収	
1689	2		不作 盛岡洪水 既内大凶作	
1690	3		既内大凶作 八戸領不作	
1692	5	凶作	凶作	
1694	7	大凶作皆無作	凶作 霖雨 早冷	
1695	8	弘前藩餓死3万	大凶作皆無作 冷害 飢饉 盛岡藩餓死5万	
1696	9		不作	
1699	12	凶作	大凶作2分作 霖雨 早冷	
1700	13		不作 (前年影響)	
1701	14	大凶作	大凶作皆無作 冷害	
1702	15	大凶作	大凶作皆無作 霖雨 飢饉	
1703	16	早不作	凶作	
1705	宝永2	凶作	凶作 5分作夏霖雨 春早魃	
1707	4		不作 5分作霖雨 暑 飢饉	
1718	享保3	疫病流行	疫病流行	
1720	5	凶作	凶作 既内飢饉	
1724	9	豊作	不作 霖雨 大洪水	
1725	10	ひでり豊作	ひでり凶作	
1728	13	八戸大洪水不作	不作 霖雨 大洪水	
1729	14		不作 大風雨	
1731	16		不作 大風雨	
1732	17		不作 田圃虫害	
1733	18	豊作	不作 田圃虫害 大早魃	
1736	元文1	豊作	凶作 飢饉	
1741	寛保1	豊作	不作	
1744	延享1	豊作	不作 虫害	
1745	2	不作	不作	
1748	寛延1		凶作 虫害 早魃	
1749	2	大凶作皆無作	凶作 2分作 霖雨 風雨	
1753	宝暦3		凶作	
1755	5	大凶作皆無作	大凶作皆無作 霖雨大飢饉	

1756	6		凶作 5分作 前年影響	
1757	7		不作 6分作 霖雨 洪水	
1762	12	凶作 5分作		
1763	13	凶作 4分作		
1764	明和1	大豊作 八戸領凶作		
1765	2		不作 早魃 大雨	
1766	3	大豊作 八戸半作		
1767	4		凶作 早魃 霖雨 虫害	
1772	安永1		凶作 霖雨 洪水	
1773	2		凶作 大雨 虫害	
1774	3	疫病流行	疫病流行	
1775	4	不作 疫病数方死亡		
1776	5	不作 疫病 はしか		
1777	6		凶作 3分作 霖雨 洪水 山崩れ	
1778	7		凶作 霖雨 洪水	
1779	8		不作 5分作 霖雨 洪水	
1781	天明1	豊水川大洪水	不作 7分作 霖雨 洪水	
1782	2		不作	
1783	3	大凶作皆無作	不作 5分作 冷害 大凶作皆無作 霖雨 早冷	
1784	4		大霜害 大飢饉	
1785	5		不作 7分作 飢饉	
1786	6		凶作 3分作 霖雨 風雨	
1787	7		山崩れ 飢饉	
1788	8		凶作 3分作 霖雨 大飢饉	
1789	寛政1		凶作 5分作 霖雨 飢饉	
1791	3		凶作 風雨 大洪水	
1793	5		凶作 5分作 大雨洪水早冷	
1795	7		凶作 6分作 大風雨	
1796	8		凶作 穂付増霖雨	
1799	11	凶作 6分作	凶作 低湿、早魃 洪水	
1801	享和1		凶作 洪水	
1813	文化10	凶作	大凶作 2分作 霖雨早冷	
1814	11		凶作 霖雨 洪水	
1816	12		凶作 霖雨 早冷	
1825	文政8		大凶作 4分作 霖雨 早冷	
1832	天保3		大凶作 4分作 早冷	
1833	4	大凶作皆無作	大凶作皆無作 霖雨大飢饉	
1835	6		大凶作 4分作 霖雨大飢饉	
1836	7	大凶作	大凶作皆無作 霖雨大飢饉	
1837	8	凶作 5分作	大凶作 4分作 大飢饉	
1838	9		大凶作皆無作 大飢饉	
1839	10		凶作 4分作	
1849	嘉永2		不作	
1850	3		不作	
1853	6		不作 早魃	
1856	安政3	八戸、地震 津波		
1866	慶応2		凶作	
1869	明治2	大凶作	大凶作	
1870	3		凶作 霖雨 霜害	
1886	19	ユウ流行 3774人死亡		日清戦争
1887	20	天然痘 1015人死亡		
1894	27		大津波	日露戦争
1896	29			
1902	35	凶作		
1904	37			
1912	大正1			スペイン風邪
1913	2	大凶作		
1919	8			
1923	12			関東大震災
1927	昭和2			
1931	6	冷害凶作		
1933	8		三陸地震 大津波	大太平洋戦争

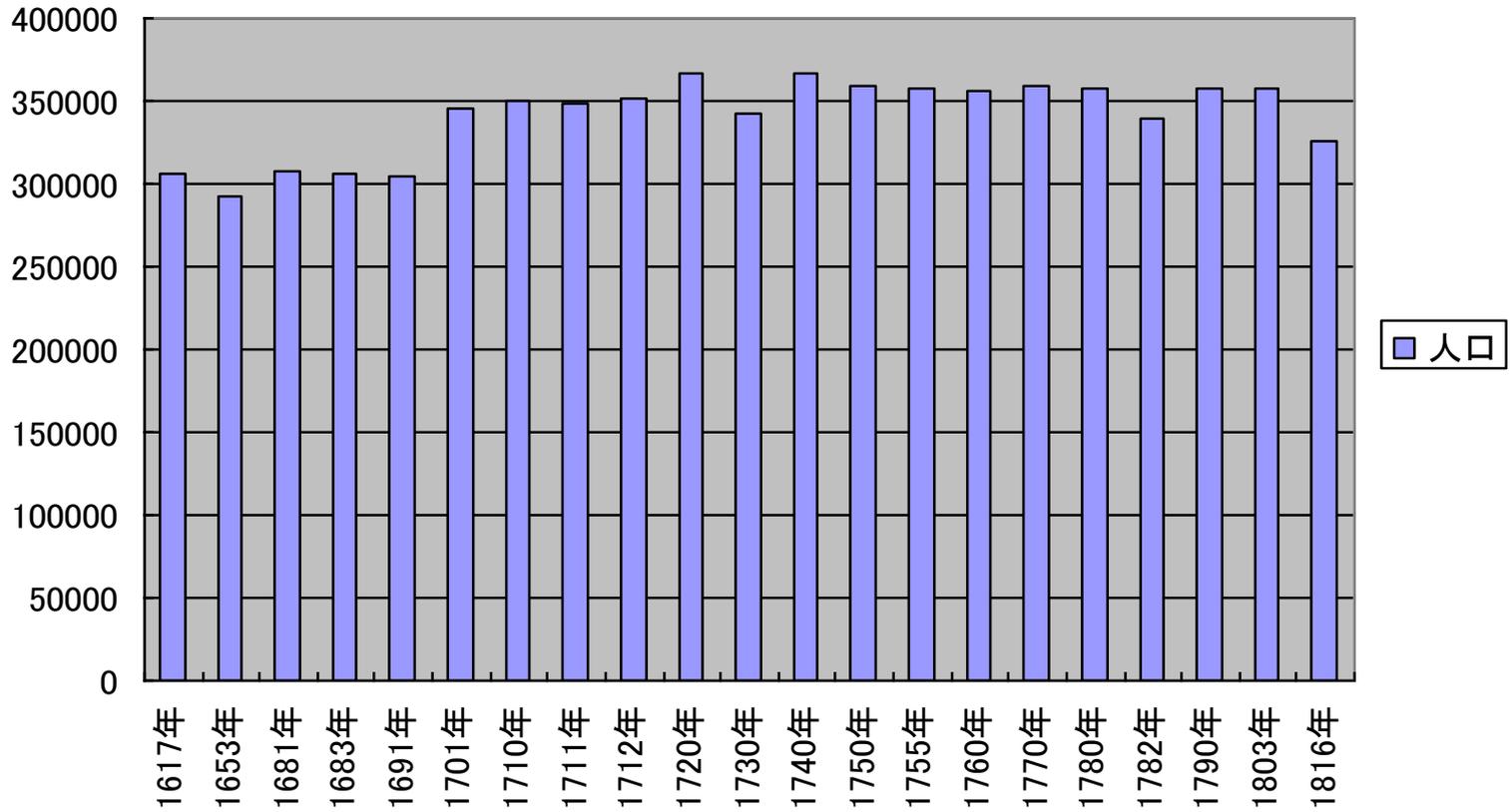
(鎌倉共産「岩手県の歴史」山川出版、S47)
 (宮崎道生「青森県の歴史」山川出版、S52)
 (日本地理研究所「日本地誌3」二宮書店 1975) など参照

作柄に与えた自然災害例（盛岡藩1615年～1869年）

回数で表示



盛岡藩人口推移





(五)
第三日に射られた猿(六頭)。
ツツキの部下の「神楽の猿」の首にて。
大滝谷に夕時迄、んとする頃。
向て右、宮本繁夢、電氏、左、藤子郎。

奥羽銀嶺猿群獵記

川端理事

薬師越え

二月二十八日一行六人、積雪八尺餘の積雪の中をイリスミの澤に入つた頃雪上に雨来る。積雪低く飛来り、飛去り、
私共の越えやうとする薬師ヶ嶺は雲の中に姿を隠してしまひ、遂に私共の行きさへ見えないう有様となる。
雪中の雨に全身の濡れる幸さは體験した人のみの知るだ。
一行は澤の途中の橋の下に雨を除けて行かうか、歸らうかの相談をしたが、兎にも角にも中邊まで登つてみやうと云ふ
ことになる。

中邊の原始林に二つの小さな小屋があり、善寺の親爺中名獵人其六爺が錫の薪木を削りに来て泊つてゐる。

私共の聲で親爺は小屋の藪の垂れを掲げて出て来た「早くこの荒天に來たノウ」

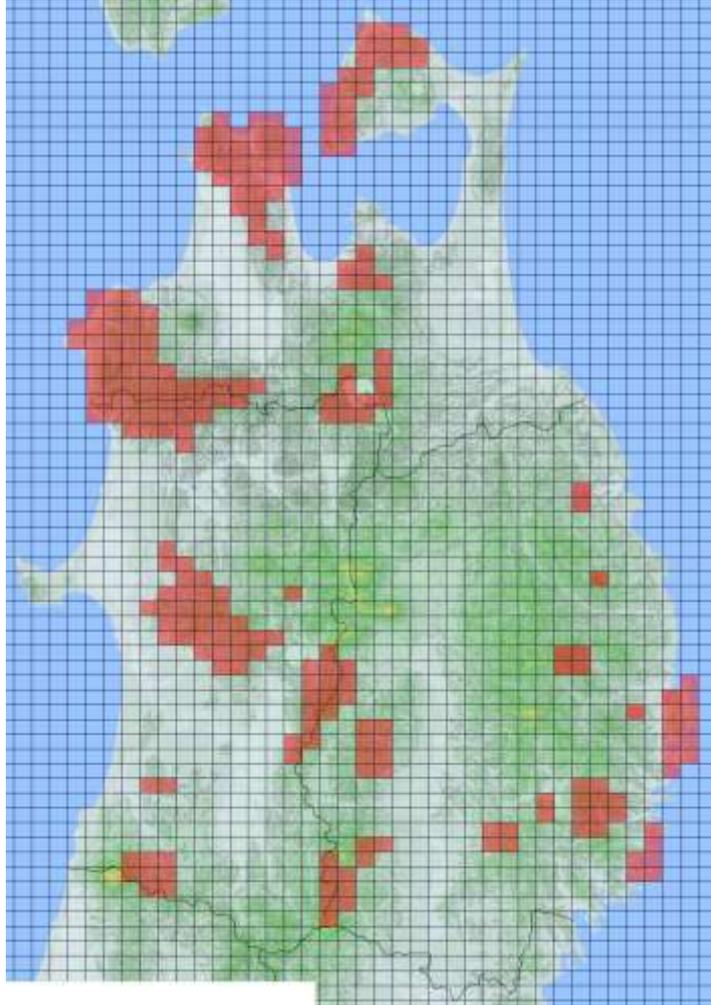
親爺は老の眼をしばたいて云ふ。

「どうだ親爺この天候は」

宮本氏は第一番に聲をかける。

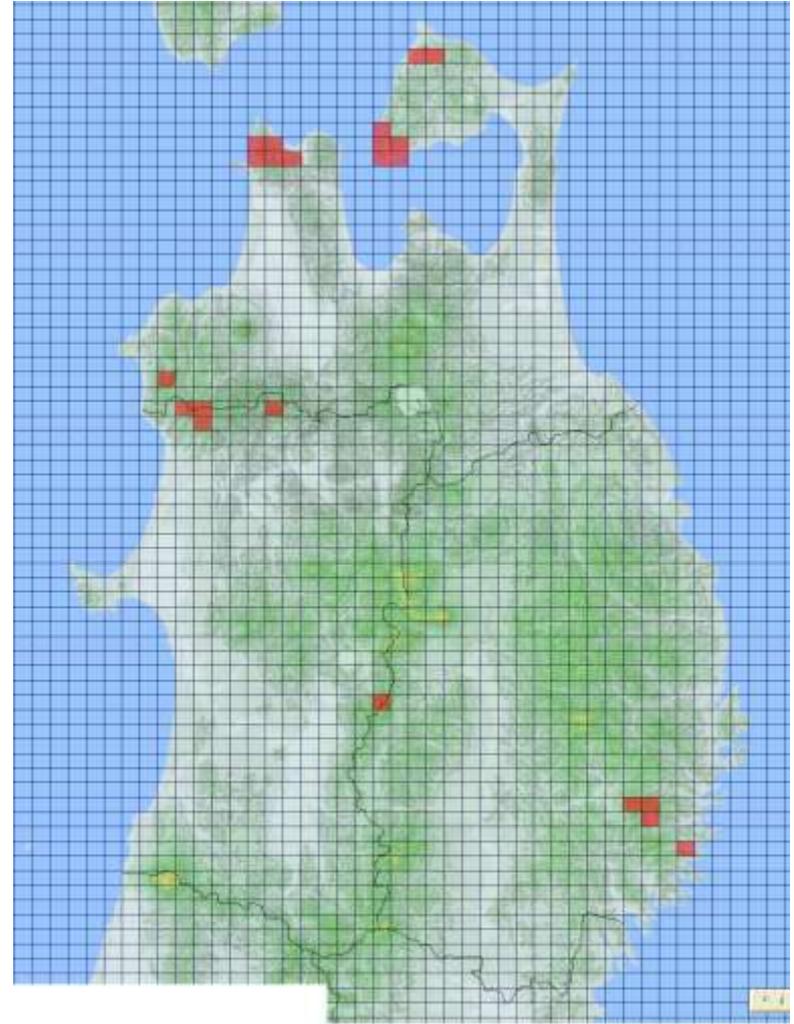
「この空では薬師ヶ嶺は越しましめエ」十間先も見えない雨霧の中であるが、親爺は嶺の頂邊の方を眺めて云ふ。
遙かの薬師ヶ嶺の嶺は轟々と山鳴りがしてゐる。

ことの発端

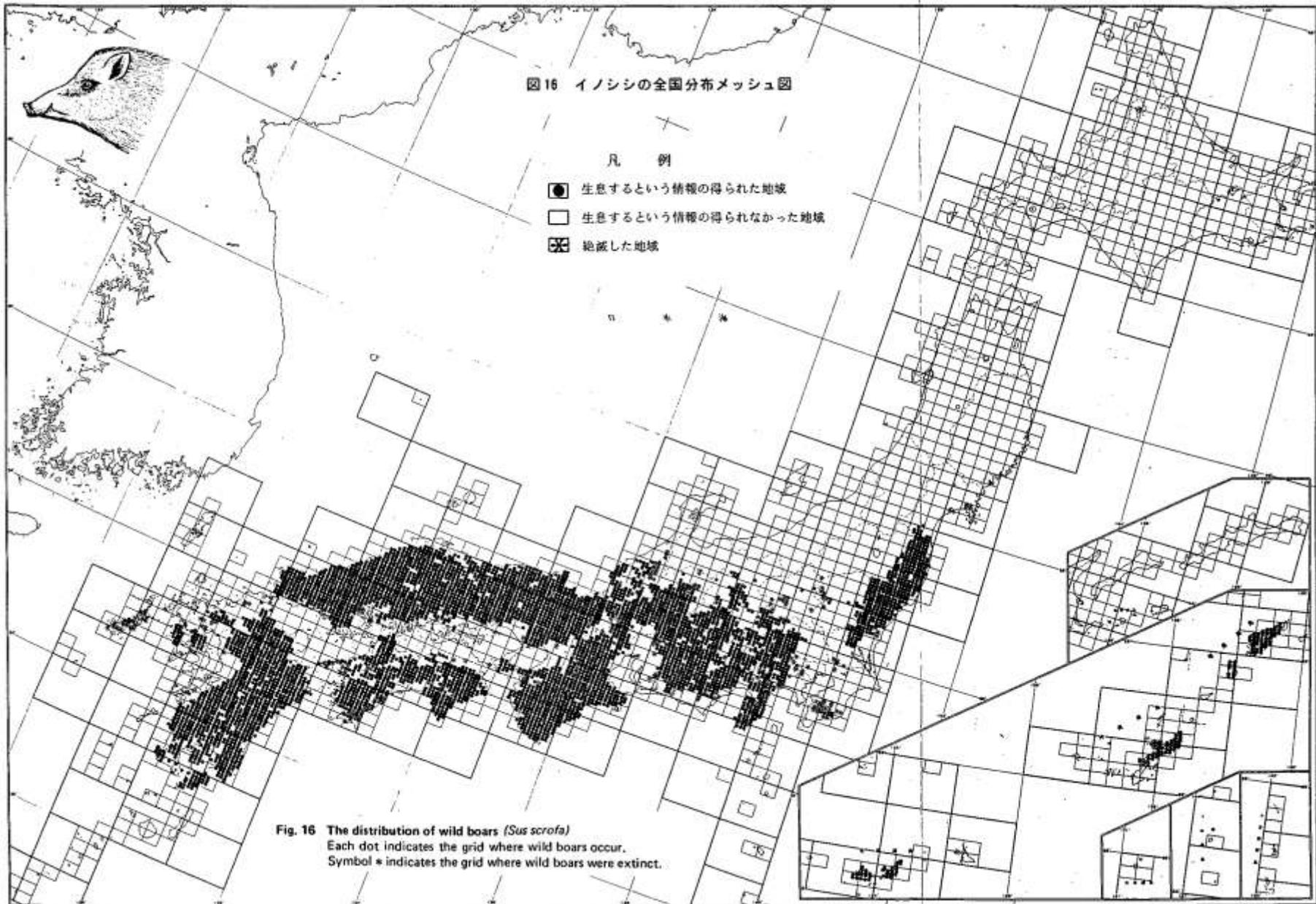


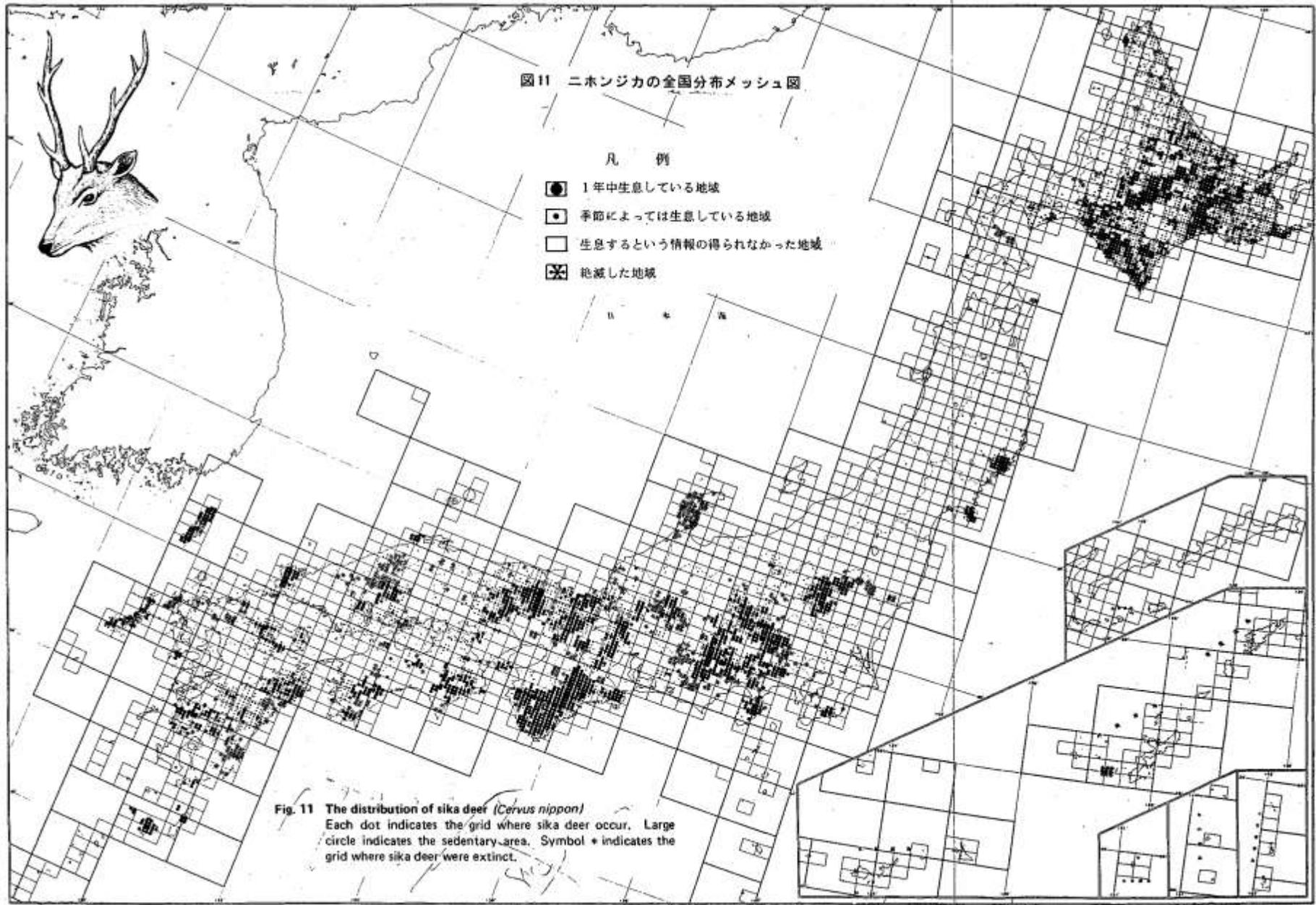
1890年(明治23年)

ニホンザル分布の縮小



1960年(昭和35年)





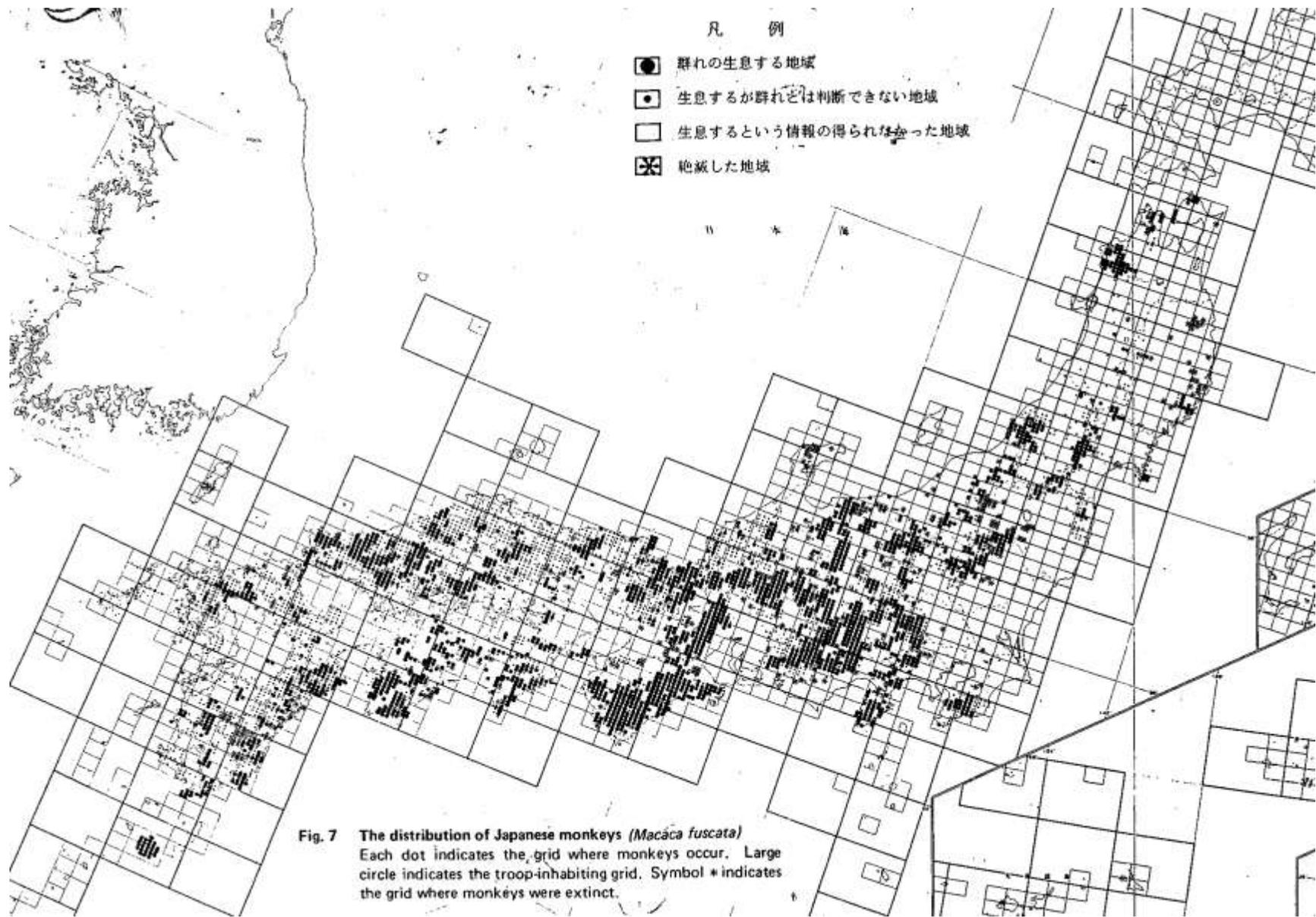
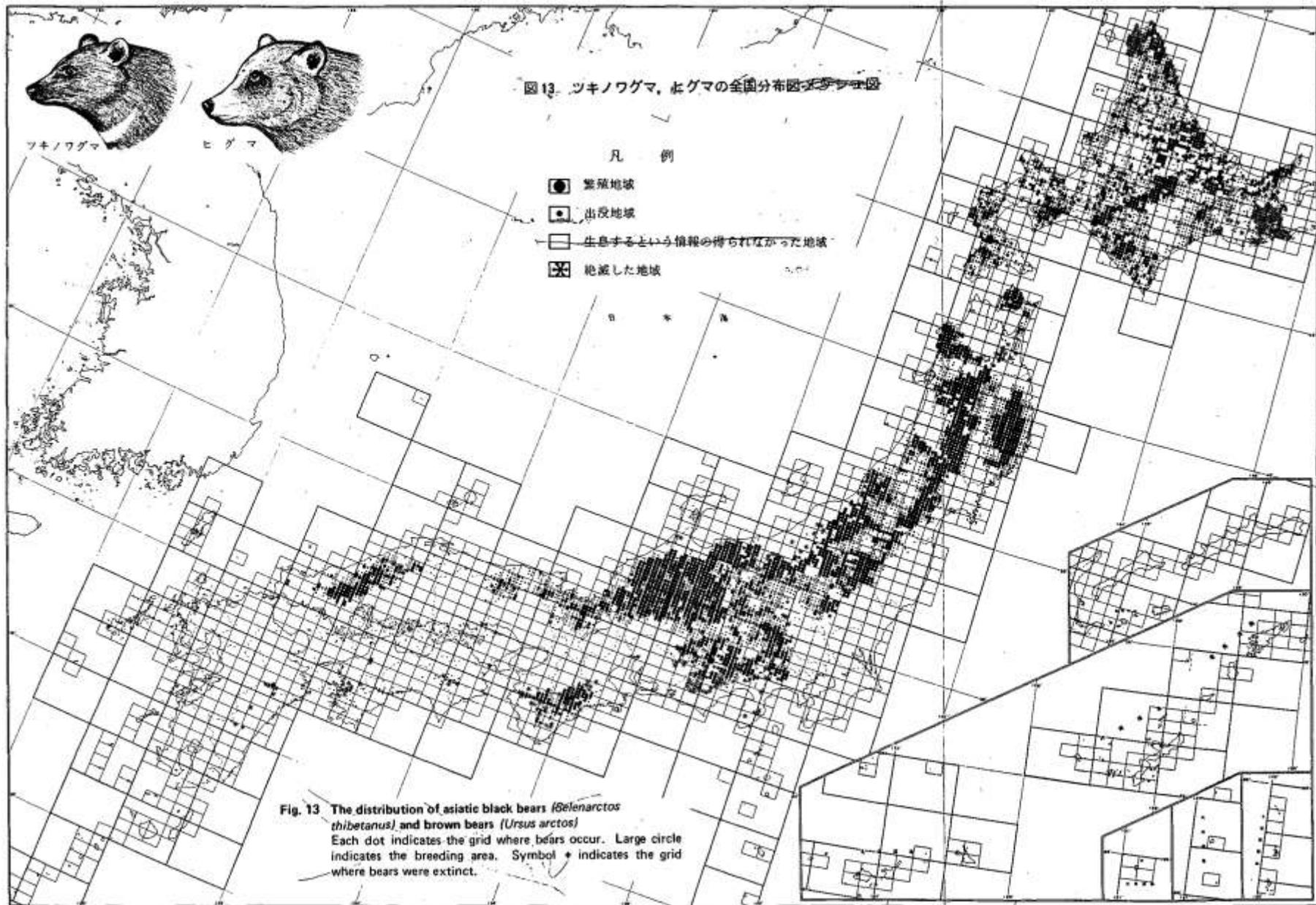


Fig. 7 The distribution of Japanese monkeys (*Macaca fuscata*)
 Each dot indicates the grid where monkeys occur. Large circle indicates the troop-inhabiting grid. Symbol * indicates the grid where monkeys were extinct.



1970年ほ乳類分布

竹下完1970ニホンザルアンケート調査より



竹下完1970ニホンザルアンケート調査より



竹下完1970ニホンザルアンケート調査より



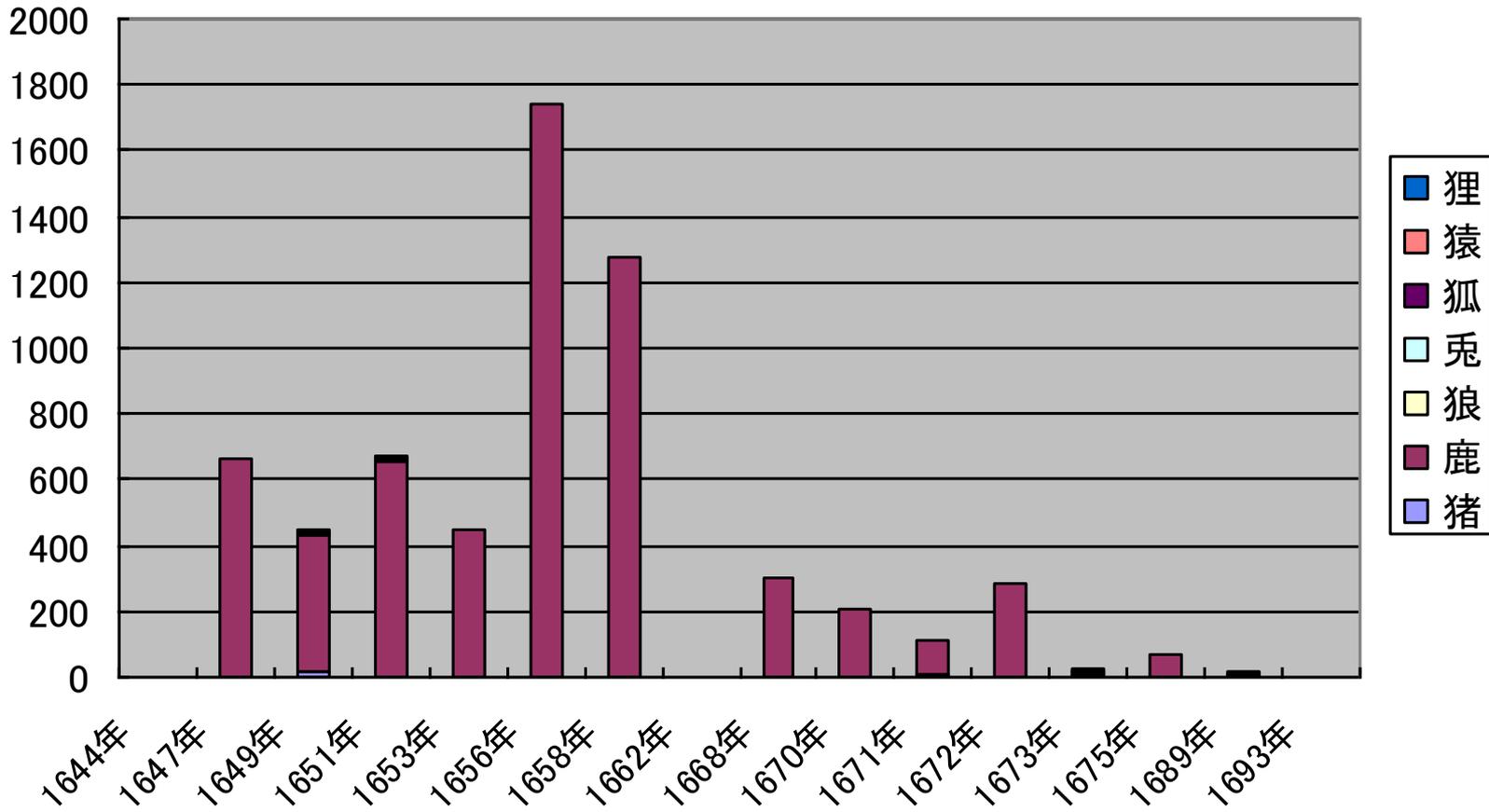
竹下完1970ニホンザルアンケート調査より



竹下完1970ニホンザルアンケート調査より

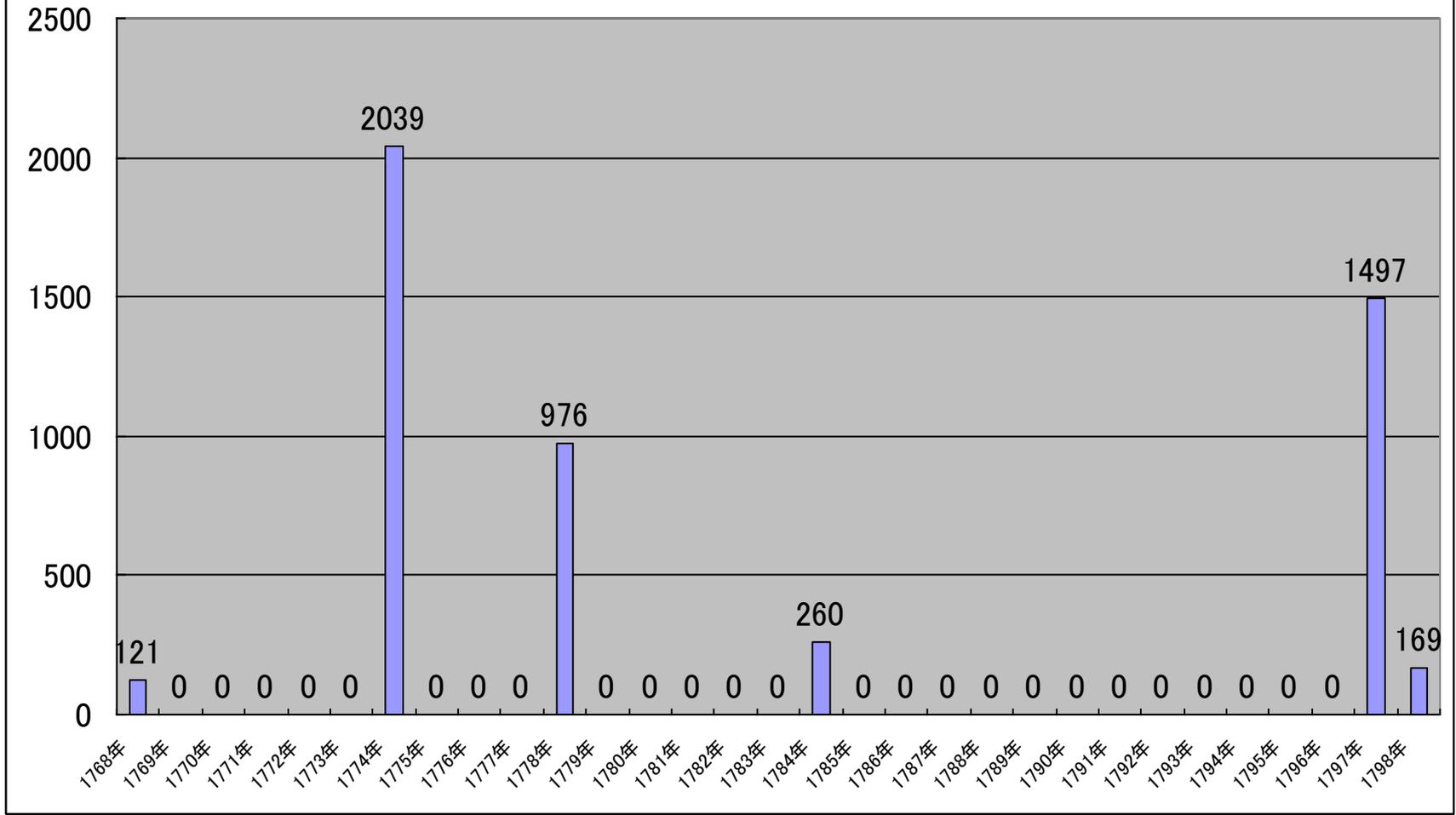


盛岡藩主若殿狩猟記録(1644~1693)



1680-1709(生類憐れみの令)

八戸藩鹿荒れのための駆除頭数

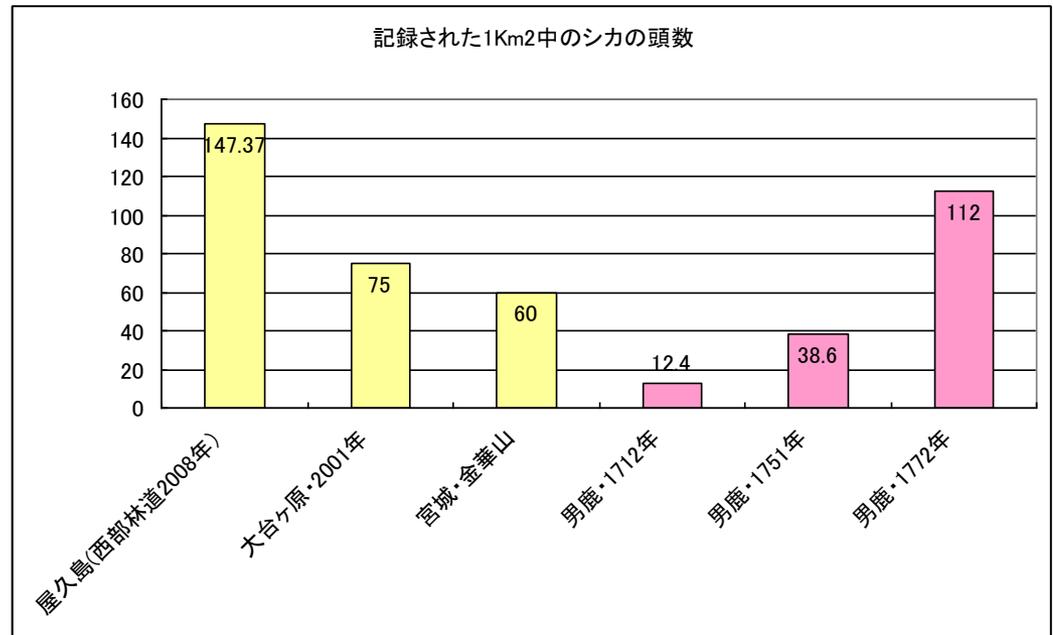
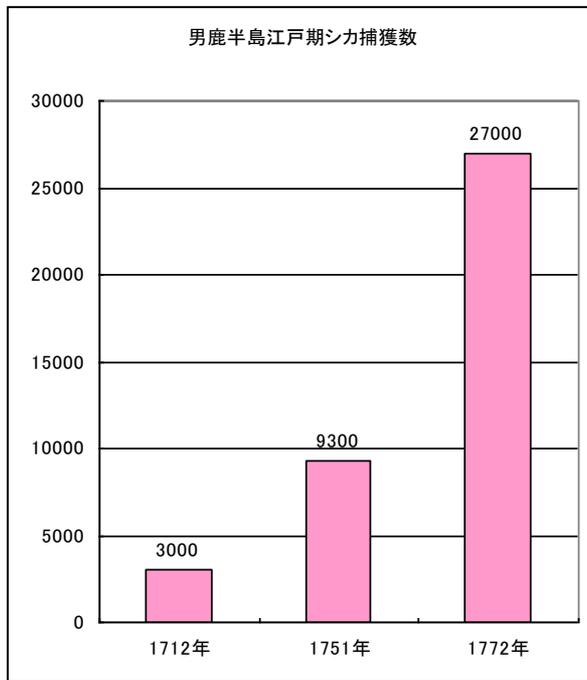


1680-1709(生類憐れみの令)

(付録)江戸期・男鹿半島のシカ生息数はありえる数字か

秋田・佐竹藩(久保田藩)男鹿半島鹿狩り

男鹿半島面積＝男鹿市面積とする＝ 240.8 Km²



密度から見れば、江戸期の男鹿半島の数値は絶対あり得ない数値とはいえない。

1680-1709(生類憐れみの令)

有名な八戸藩イノシシ荒れについて

1745年～1754年 イノシシによる作物被害で困窮
特に1749年イノシシ飢渴により3000人死亡

- 大豆生産拡大と連作厭地障害の休耕地の拡大、その結果休耕地葛根などの繁茂がイノシシの増加を招いた。
- オオカミ駆除(1670年～1730年)によるイノシシの増加
- 八戸藩の藩主による狩猟行事のなさと肉食禁忌の強化
- 生類憐れみの令(1689年～1709年)の影響

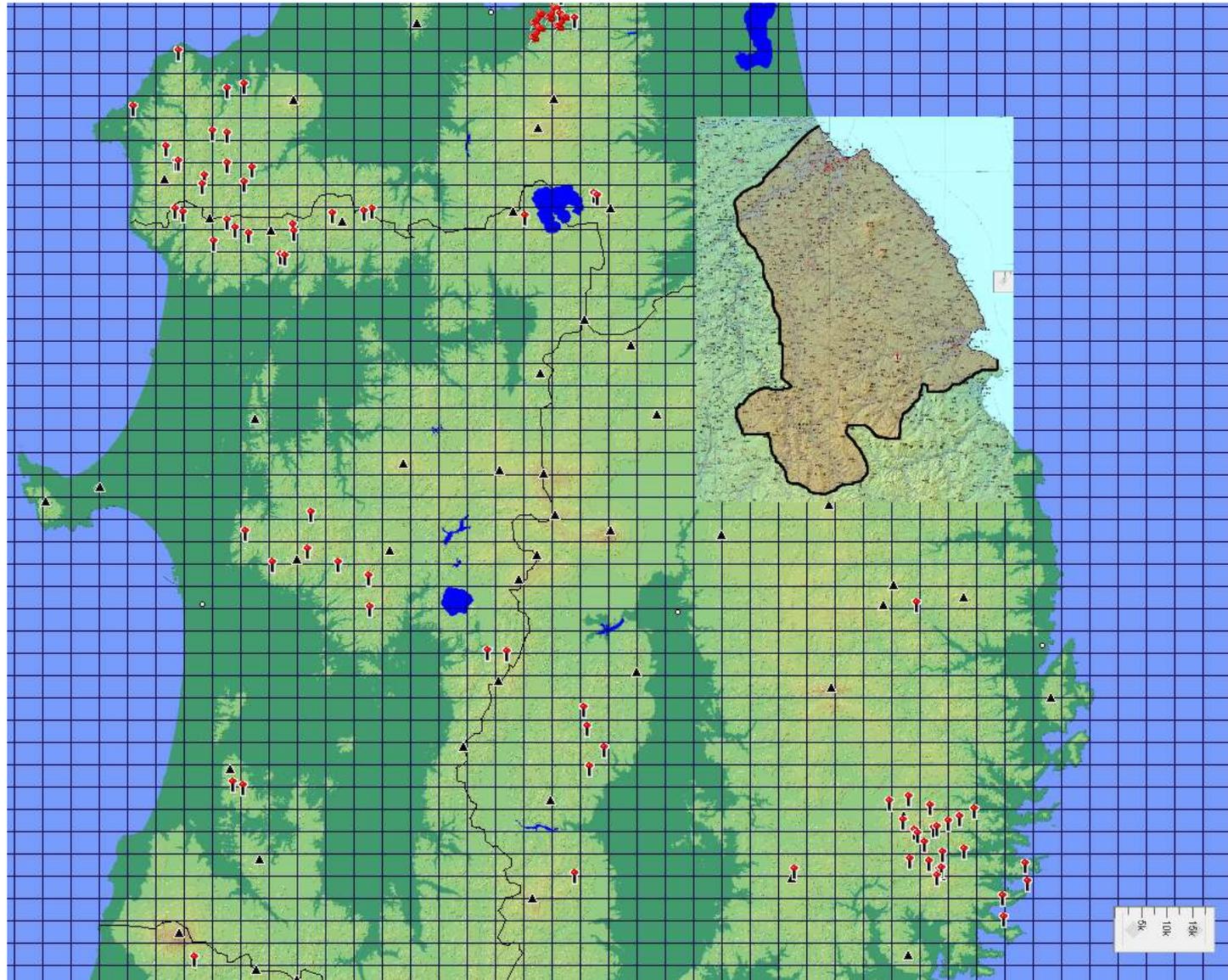
犬に関する記述

1746年	猪荒れのため犬を飼い置くよう達し
1749年	猪取りのため久慈の狩り巧者7人+犬5匹派遣
1751年	家中町内では、犬による怪我人多く犬抱えを停止
1808年	「病犬」多く、犬狩り命令
1808年	犬狩り、総数444頭(♂264頭、♀180頭)
1813年	犬狩り命令

盛岡藩全図



八戸藩は1664年(寛文4年)盛岡藩から独立



オオカミによる人馬への被害

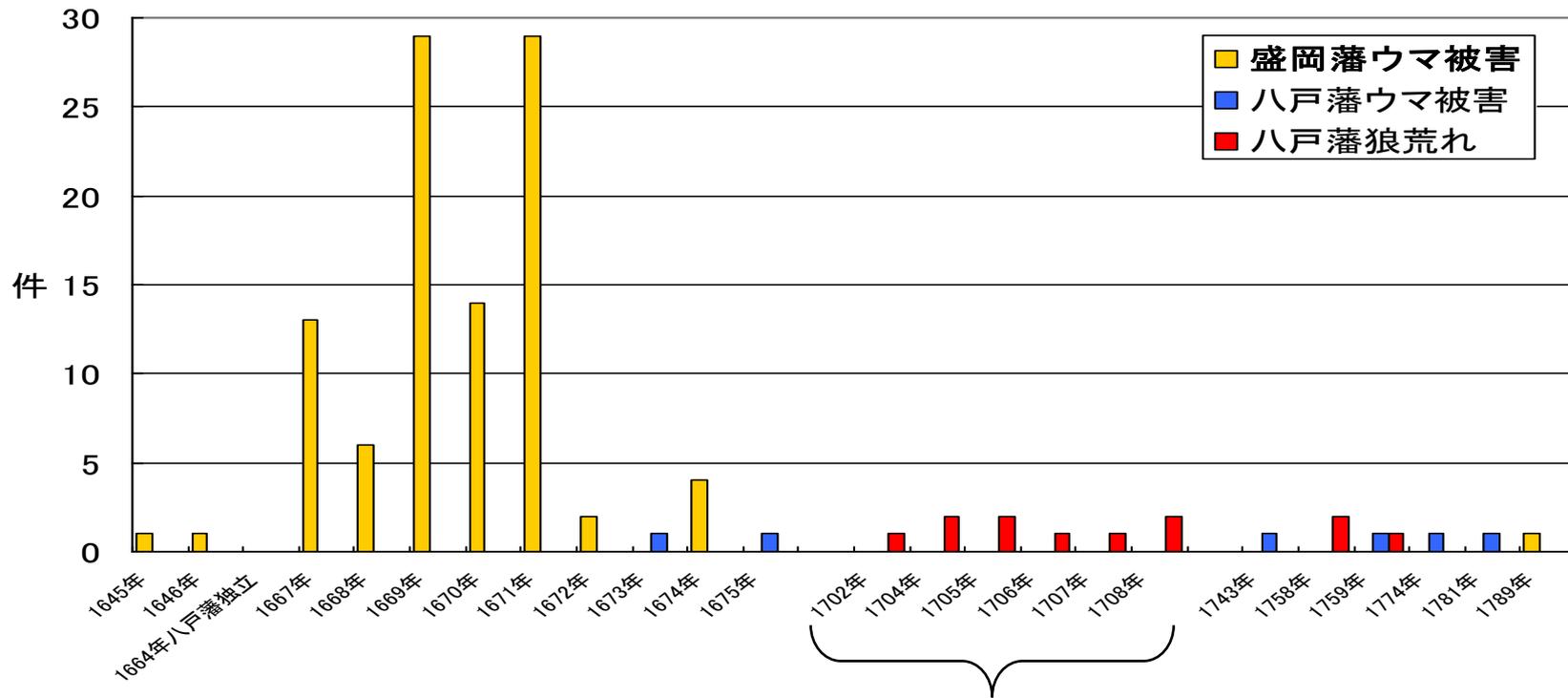
人への危害記録は少ない

1674年(盛岡藩山根通) 人家へ入る
1704年(八戸藩山根通) 人馬へ危害
1704年(八戸藩軽米通) 人を殺害

東北班:菊池勇夫氏による文書抜き書きと論文「猪荒れと地域社会ー八戸藩名久井通を中心にー」で明らかにされたデータを時系列でグラフ化したもの(以下 同)

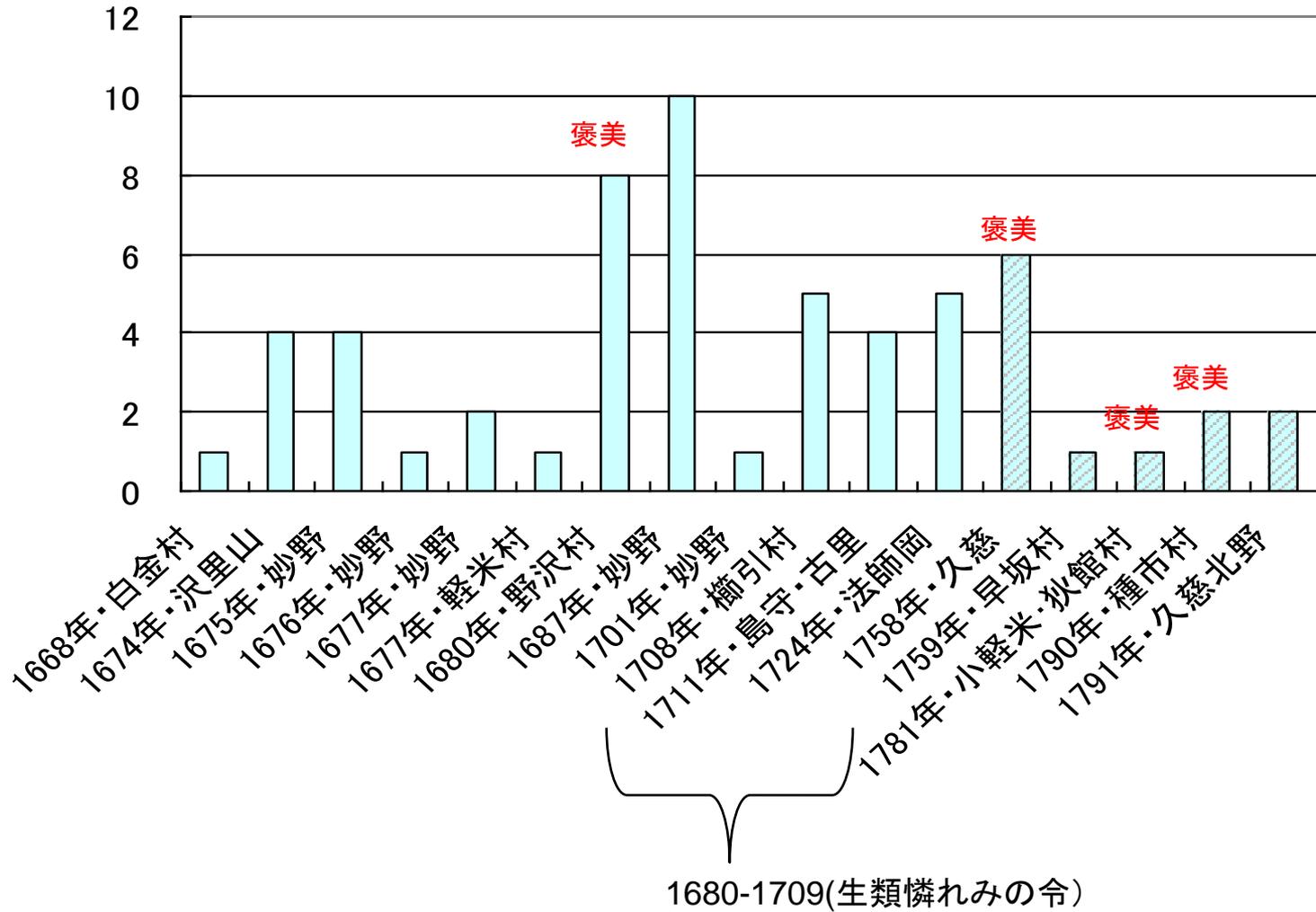
馬への危害

オオカミによるウマの被害(盛岡藩 未完 八戸藩は菊池氏分より抜き書き)



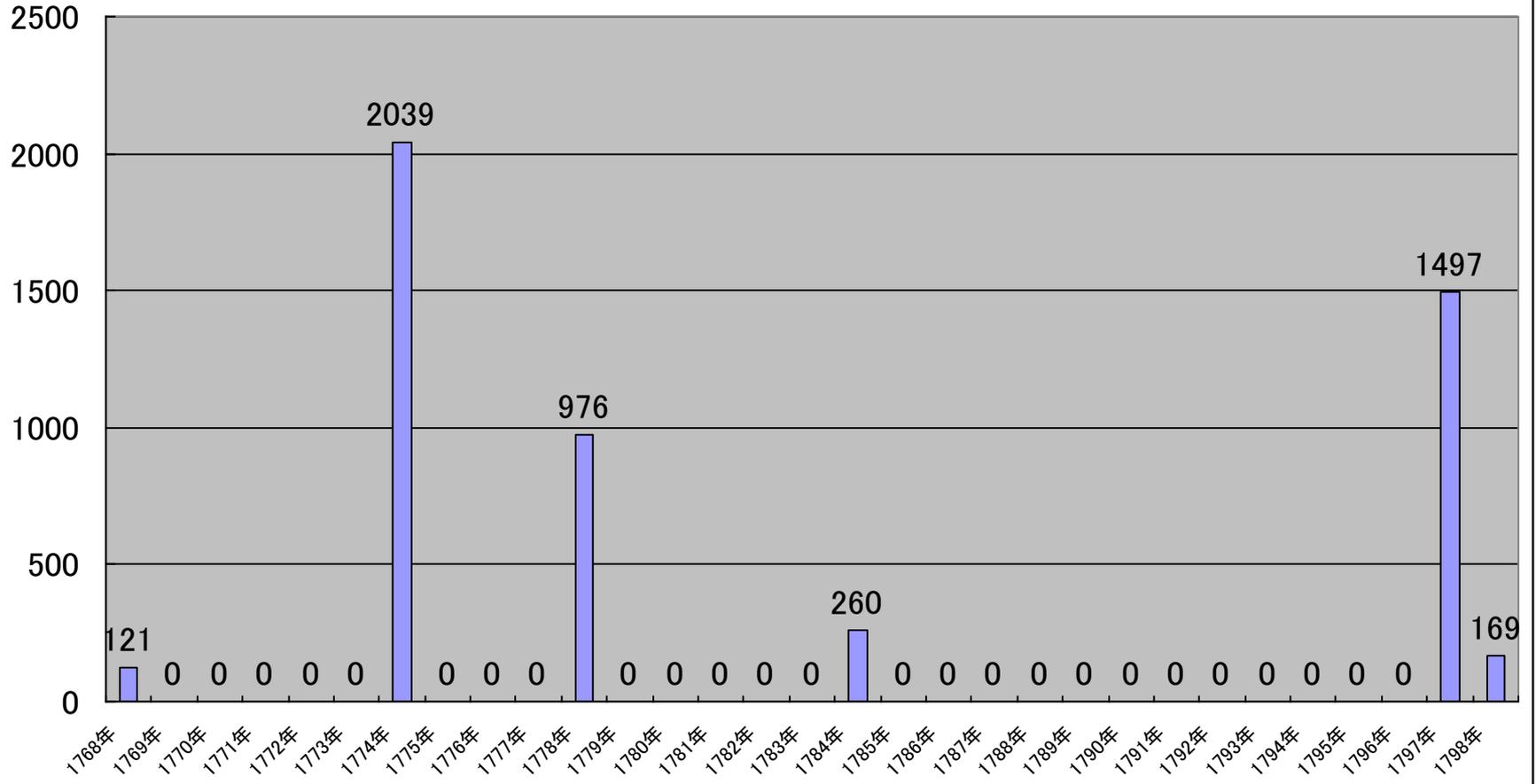
生類憐れみの令
1680~1709

1668年～1790年八戸藩内狼駆除頭数



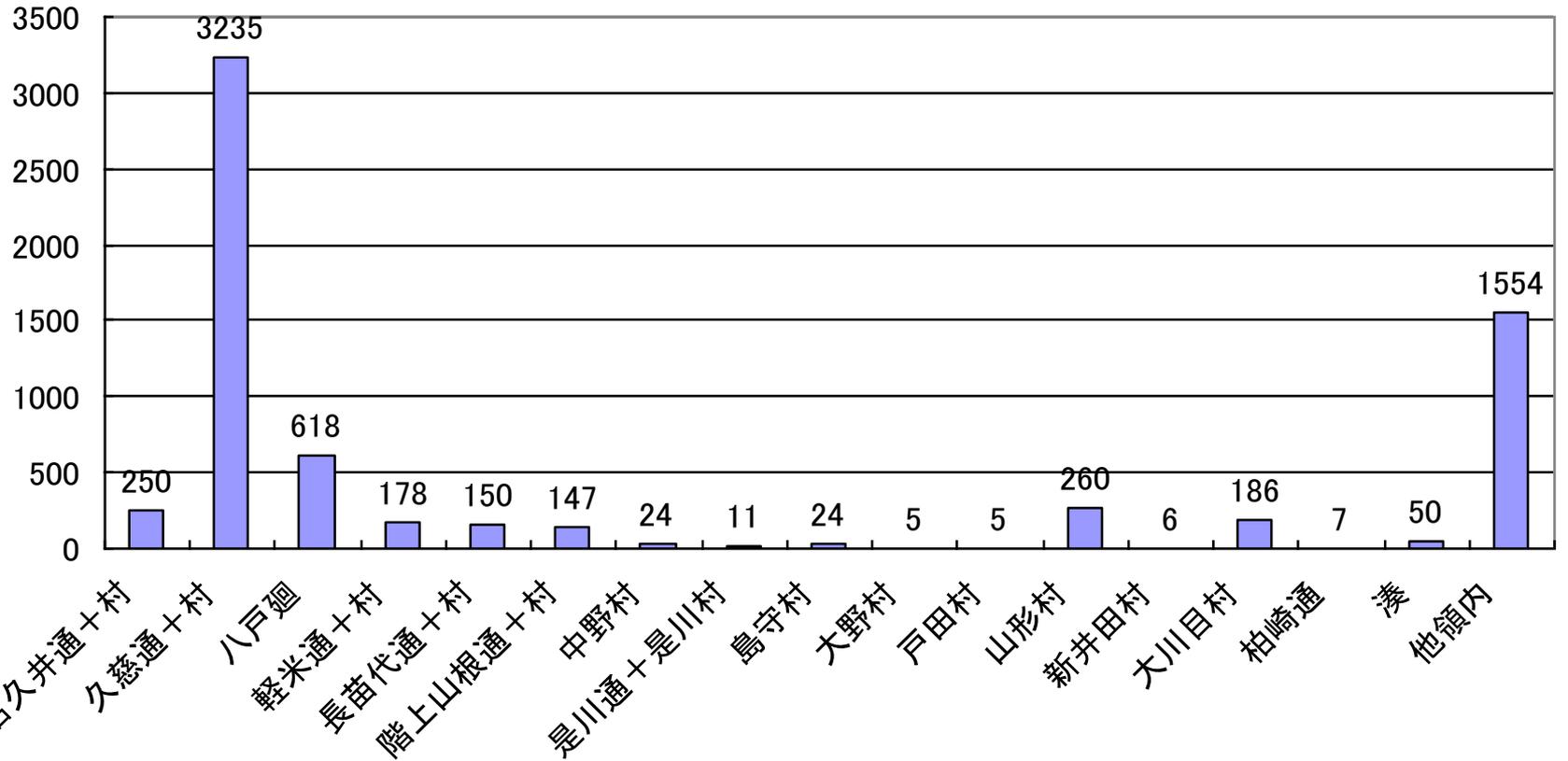
褒美は褒美の記録 : 1頭につき200～300文

八戸藩鹿荒れのための駆除頭数

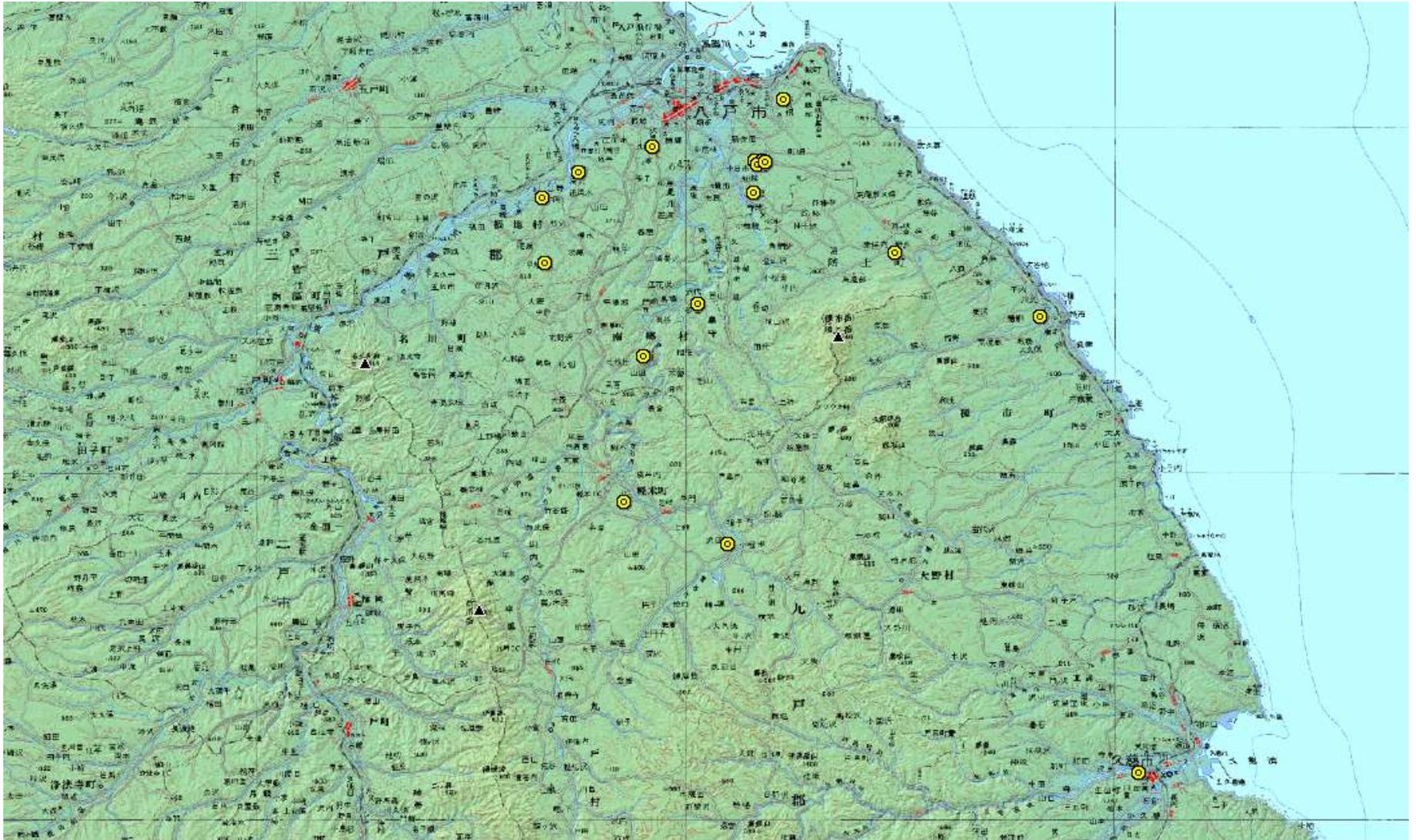


生類憐れみの令
1680~1709

八戸藩 シカ駆除数



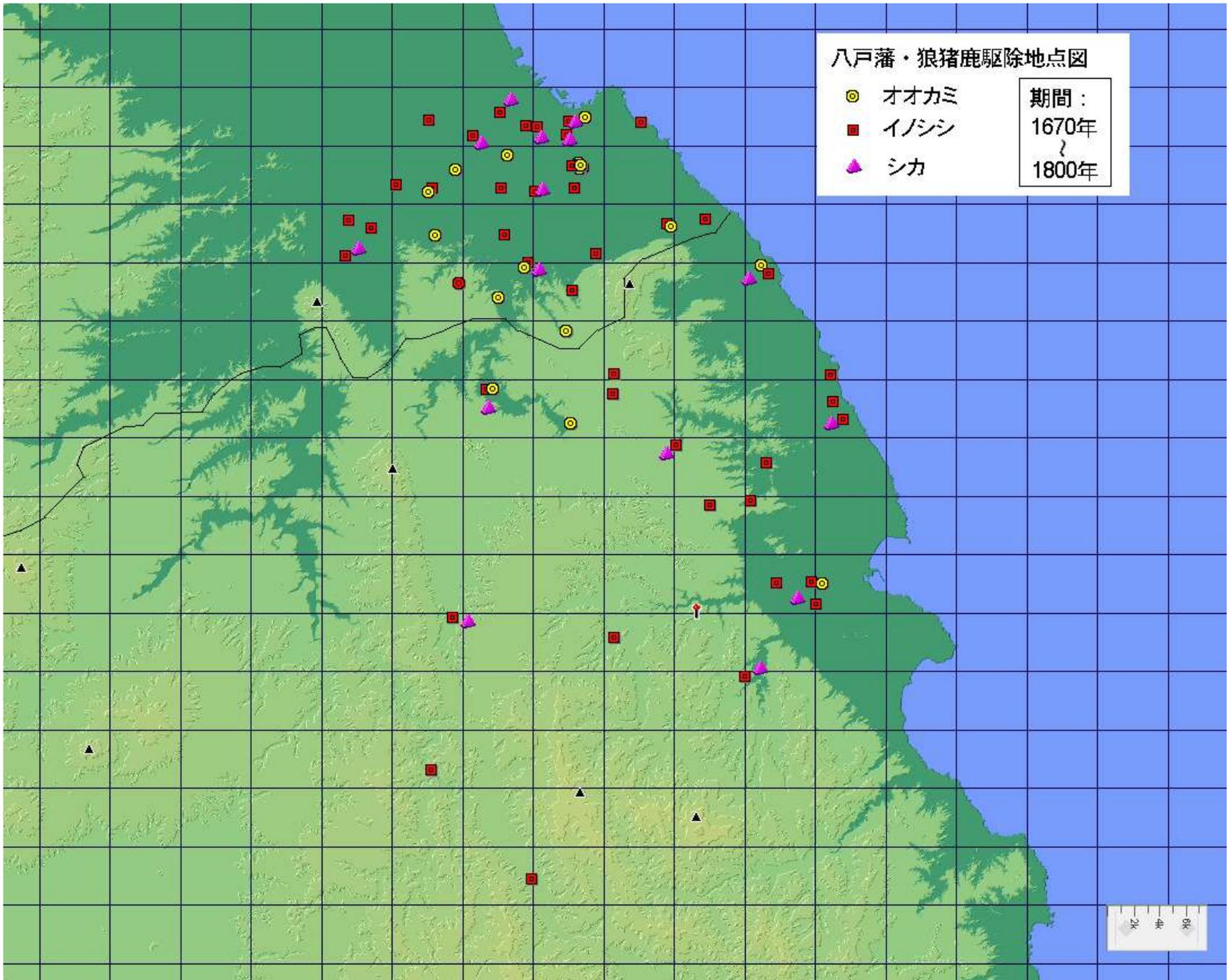
八戸藩でオオカミが駆除された場所(期間:1670年~1800年)



八戸藩・狼猪鹿駆除地点図

- オオカミ
- イノシシ
- ▲ シカ

期間：
1670年
～
1800年



円は半径20Km オオカミは1日平均40Km移動

八戸藩・狼猪鹿駆除地点図

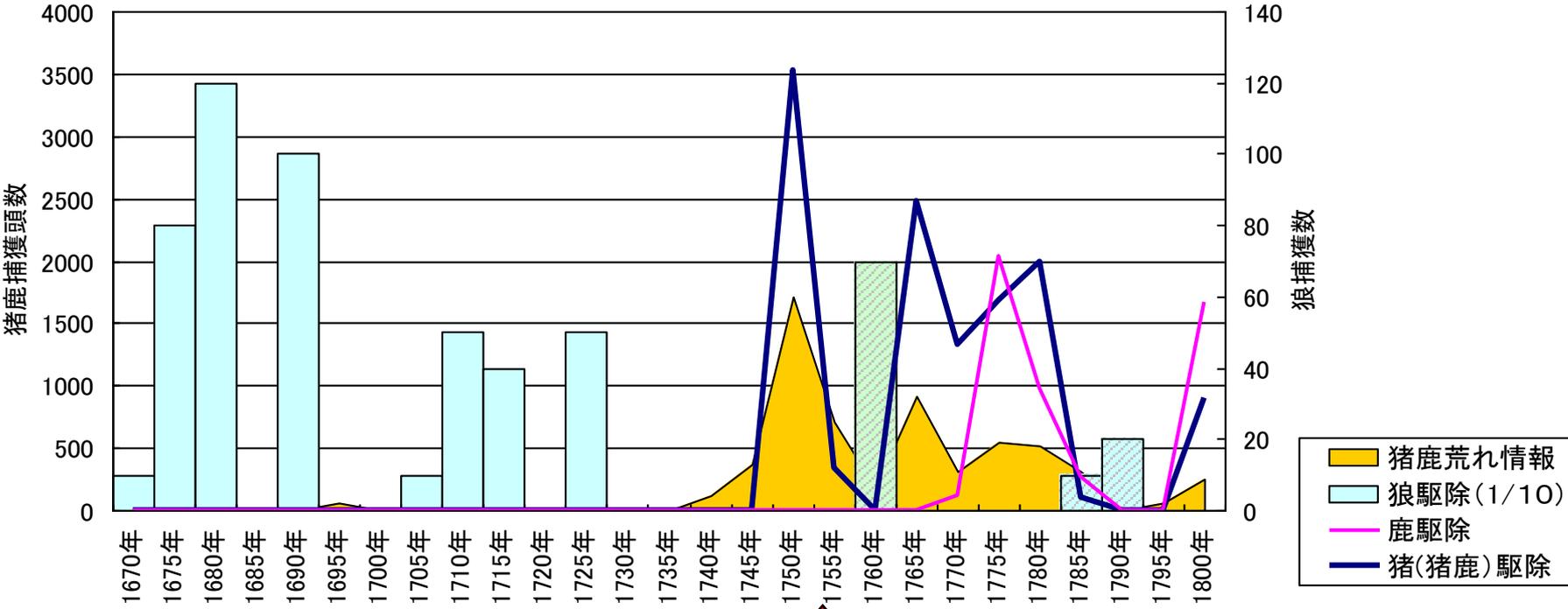
- ◎ オオカミ
- イノシシ
- ▲ シカ

期間：
1670年
～
1800年



※ 5年ごとにまとめたもの

八戸藩猪鹿狼捕獲駆除頭数



生類憐れみの令
1680~1709

1749年猪飢渴3000人飢え死

- ・ 盛岡藩藩主若殿は狩猟好きで、1643年から50年間ほどは狩猟記録が多い。その後の記録には(未出版?のため)当たっていない。
- ・ 盛岡藩藩主などの狩猟で1647年～1675年までの28年間で鹿のみで6173頭。
- ・ 日本海側男鹿半島では秋田・佐竹藩主が鹿狩りで1712年に3000頭、1751年9300頭・1772年27000頭という記録がある。
- ・ 八戸藩ではこの間(1664～1858)藩主による狩猟記録は0件
- ・ 八戸藩では、農民による訴えでの獣駆除回数は極端に多い。ここでは生類憐れみの令はほとんど効いていない?
- ・ 八戸藩では、狼荒れ訴えで狼を駆除→鹿荒れ・猪荒れで猪飢渴まで発生し、盛んに駆除。

江戸時代における東北地方での鹿・猪・狼など獣の地域的絶滅進行の歴史的背景には、

- ・ ◎盛岡藩では藩主の盛んな狩で鹿、猪が、馬被害対策で狼狩りが行われた。
 - ・ ◎八戸藩では農民訴えによる狼捕殺→鹿・猪捕殺。
 - ・ ◎秋田藩では男鹿半島で藩主による鹿の集団捕殺。
- よる影響が考えられる。

江戸期、オオカミ減少をめぐる諸見解

- 江戸時代、東北地方北部ではイノシシ、シカの地域的絶滅以前にニホンオオカミは藩営牧でのウマ被害をなくすため、藩は褒美までだして積極的に捕殺していた(おもに1670年～1725年)。
- 盛岡藩藩主は1643年から50年間ほど盛んに狩を行い鹿のみで6173頭狩った。
- 八戸藩では藩主による狩猟は行われなかったらしい。
- 八戸藩では、イノシシ・シカがいなくなったから、餌がいなくなって捕食者のオオカミがいなくなったという関係ではなく、オオカミを駆除したらイノシシが多くなって作物被害・飢渴が出て、人がイノシシを駆除し始めた(1745年～)という関係である。
- 1747年(延享4年)軽米通での記述
「近年狼一切おらず、猪荒れのところ、この節軽米通に狼が出、猪1頭も見ずとの由。」
- 「病気」の感染でオオカミがいなくなったという意見もあるが。病犬の話題は1750年以降であり、この説は当たらないだろう。

※ 「オオカミがイノシシやシカの害から農作物を護ってくれる神というのは、「ヘビが穀物を食うネズミを退治してくれる」というヘビへの信仰と同様、自然観察による理解があた。「犬神様」